12月19日：その拳、血濡れず

◇

今、アージェンアウルはどちらの陣営にも所属していない無所属のプレイヤーだ。

それは新王陣営の背後であるフィフティシアに辿り着いていることからも明らかであり、もし彼女がその正義感のままに前王陣営についていれば彼女はここに辿り着くために多大な労力を費やす羽目になっていただろう。

だからこそ、カイソクとの戦いにおいてアージェンアウルは現在深刻な制限を受けている。

───聖者は悪徳を為さず、悪業を成さず。

イベント中特殊裁定(ゲーム的な言い訳)を受けていない、無所属の大聖者は通常通りの制限が適用される。

即ち、プレイヤーをキルした時点でジョブが剥奪されるという…………PvPをするなど論外というべき、重い制約をだ。

「回避ばかりとは……っ、ミーティアスとは随分と毛色の違う戦い方じゃあないか……！」

「そうかしら？」

何度か反撃こそしてくるものの、殆ど攻撃を避ける事ばかりに偏重しているアージェンアウルの動きに、カイソクは煽るように言葉を投げかけながらも考える。

シルヴィア・ゴールドバーグの”強み”とは何か、それは格ゲーマーたちの中で何度も何度も繰り返し議論されてきたことだ。ある者は尽きせぬスタミナと言い、またある者は恐るべき洞察力と言い、あるいは単純に反応速度がお化けと言う者もいた。

なるほど、それらは全て正解だろう。数時間以上途切れない集中力、相手の動きを見抜いて自分の動きを通す洞察力、どれだけ不意を打とうともすぐさま対応する反応速度。あらゆるパラメータがハイレベルだからこそシルヴィア・ゴールドバーグは最強なのだ。その上でカイソクは「シルヴィア・ゴールドバーグ最大の強みは決して自分のバトルスタイルを曲げない」ことであると考える。

───彼女こそがミーティアスだ。

多くのファンから、そして原作コミックの作者から贈られたこの言葉は格ゲーマーにとって……否、ギャラクシア・コミックファンにとって最大の名誉であり、ギャラクシア・ヒーローズシリーズユーザーとして最高の栄誉だろう。

その言葉は彼女がバトルスタイル「ミーティアス」を曲げなかったからこそ、歪みなくそれを貫き通してきたからこそだ。その単一のバトルスタイルを誰もが対策しようとし、だがしかし誰もが太刀打ちできなかった。魚臣 慧は確かにシルヴィア・ゴールドバーグに唯一の黒星をつける、という偉業を成し遂げたがバトルスタイル「ミーティアス」を揺るがしたのはカイソクが覚えている限り一人しかいない。

バトルスタイルを重ねるでもなく、ロールプレイをするでもなく、しかしあのアメリア・サリヴァン以上に「凶星」だった謎の人物との激闘。幼い少女(ＮＰＣ)の危機と、それに伴う一連の会話以降……あの瞬間だけは、ミーティアスではなくシルヴィア・ゴールドバーグとしての闘争心が確かに漏れていた。

「ふぅ………ッ！」

猛攻で消耗したスタミナを回復するために距離を離しつつ、さらに思考は加速していく。

改崎(カイ) 速手(ソク)は魚臣 慧でもなければ「顔隠し」でもない。だからこそ今戦っているアージェンアウルがバトルスタイル「ミーティアス」ではない事が大きな違和感になっている。

確かにカイソクはアージェンアウルに対して攻勢を仕掛けているが、有利というほどではなく、追い詰めているわけでもない。そしてこの対決を受けたアージェンアウルが手を抜いているとも考えづらい。

（なら、何故彼女は攻勢に転じない？ 何故避け続ける……？ 攻撃だって、殆どカスダメージ、何かスキルは使っているようだが……………………………）

そこで、高速で巡らせていたカイソクの思考が一つの疑問を形にした。

（待て、何故こんなにもダメージが少ない？ 何度かクリーンヒットは受けた。こちらも回復していない、防具だってそこそこのVITだ……なのに体力がまだ九割以上あるのはおかしいだろう？！）

バグ、は無いだろう。あの(・・)GH:Cの開発にも関わっているユートピア社のメインコンテンツであるシャンフロがそんなヘマをするとは思えない。小技はあっても裏技は無い、それがユートピア社が関わったゲームに対するユーザーたちの評価だ。

となれば、アージェンアウルが何らかの明確な意図の上で攻撃の威力を減衰させているということになる。

（威力を削る代わりに状態異常を付与？ いや、状態異常は無い……ヒット数に応じた威力上昇？ 覚えている限りでも十回は攻撃を受けている、倍率が低すぎる………）

デメリットしか齎さないアイテムや装備はあるにはある。だがそれをわざわざこの場面で使う理由は……あるのかもしれない。だがそこに何かのメリットを見出しているにしても変化が無さ過ぎる。

カイソクの振るう剣を回避するアージェンアウルの目には己の拳が与えるダメージが低すぎる事に対して困惑も疑問も無い。となればやはり何かを狙っている、と言う事だろうか。

「くっ…………」

スタミナが切れれば当然動きが鈍る。アージェンアウルの手の内が明かされない以上、深入りは禁物だ。距離を離しつつ、スタミナの回復を図り…………

（──────ちょっと、待て）

そこで、気づいた。

（スタミナの消耗が早すぎる(・・・・・・・)……！）

カイソクのステータス配分は対シルヴィア・ゴールドバーグ用にスタミナパラメータへ多めに振っている。それは攻勢の中にあっても不測の事態にすぐさま対応する為であり、守勢の中にあっても反撃の余力を残すためだ。

カイソクは理論派のゲーマーだ、当然「カイソク」というキャラクターデータがどれほどのパフォーマンスを実現できるのかは把握している。それはスタミナゲージを使い切るまでにどれだけ動けるか、も含まれている。

だがどうだ、今のカイソクはスタミナゲージの減りが異様に速い。

否。

「スタミナゲージそのものが………減って、いる？」

「やっと気づいたのね？ ダメージが少ないから何かがある、ってのは気づいていたようだけれど………このゲームじゃステータスパラメータに干渉する事だって出来るのよ？」

───聖者は悪徳を為さず、悪業を成さず。

ユニークシナリオ「大いなる巡礼」を開始するにあたり、聖女イリステラより贈られる言葉だ。だがこの言葉には続きがある。

───しかして聖者は非力にあらず

「カイソク。このゲームタイトルはギャラクシア・ヒーローズ：カオスでもなければギャラクシア・ヒーローズ：バーストでもない…………それをちゃんと理解しているかしら？」

拳に薄光を纏う大聖者が不敵な笑みを浮かべる。

”不殺”は弱者ゆえの「殺せない」ではなく、強者ゆえの「殺さない」であるのだと。そう断言するかのように。

本日、コミカライズ版シャングリラ・フロンティア８巻が発売しました

漫画の方についてはもはや語ることが無いほどに語った、というかそもそも語らなくても百聞は一見に如かずっていうか……という領域なので特装版の方について語りますが、こっちもこっちで毎回別ゲーばかりで需要あるんだろうか、と試しにTwitterでアンケートを取ってみたら普通に需要があったので安心している次第です。ただやっぱり明確に「旅狼」入りしたキャラを出したいので外道以外を参加させることができるまでまだまだ先なのがつらいところ……どうしてルストモルドや秋津茜の加入タイミングをリュカオーン再戦の時に確定させなかったのか、と過去の硬梨菜に対してほんのりとした憎悪を向けつつもそれはそれとして今回は久しぶりに「これ前後編にしたいって言ったらダメかな……」ってなりましたね。彼の旅路を若干ダイジェストにしてしまったのが悔やまれるところです

でもやっぱり前後編で九巻を買うのが義務になっちゃうのもちょっと違う感じがするので頑張って収めました。特装版小冊子の原稿は常に文字数との戦いでもあるのです。

そんなわけで八巻、よろしくお願いします